

VAWW-NET Japan編『日本軍性奴隷制の加害責任を問うー2000年女性国際戦犯法廷に向けての記録、全6巻（仮題）への執筆のおねがい

様

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、わたしたちは、VAWW-NET Japan（バウネット・ジャパン、正式名称「戦争と女性への暴力」日本ネットワーク、Violence Against Women In War-Network Japan）と申します。1997年秋に東京で開かれた「戦争と女性への暴力」国際シンポジウムの直後に国際的なVAWW-NETが生まれ、さらに98年6月には、このシンポジウムで採択された「戦時・武力紛争下の女性への暴力をなくすために『女性の人権』の視点に立って、平和を創る役割を担い、世界の非軍事化をめざす」（「東京宣言」）ことを目的に、日本でVAWW-NET Japanが結成されました（代表：松井やより、副代表：中原道子、西野瑠美子）。

昨年、VAWW-NET Japanでは、「慰安婦」制度という名の日本軍性奴隷制が、処罰に値する犯罪であり、国家による女性への戦争犯罪であった責任の所在を明らかにしたい、という思いから、2000年12月に「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」を開催することを提案しました。

「過去の戦争犯罪（者）を裁く」という発想じたい、日本では受け入れられがたい発想ですが、世界に視野を広げれば、ドイツでは現在でもナチス追及を続けているし、ピノチェット元チリ大統領が過去の大量虐殺・拷問を問われてチリ国外で裁かれようとする時代に入っています。また、昨年8月の国連小委員会で採択された戦時・性暴力に関するマクドゥーガル報告（VAWW-NET Japan編訳『戦時・性暴力をどう裁くかー国連マクドゥーガル報告全訳』凱風社）も、「慰安婦」問題に対し法的補償とともに責任者の刑事責任追及を取り上げたように、戦時・性暴力の責任者への刑事責任追及は国際的潮流になりつつあるのです。その意味で、この「法廷」は、「慰安婦」制度など女性への戦争犯罪（者）が処罰されず、植民地への加害責任、天皇の責任を免責した「東京裁判」（極東国際軍事裁判）を、ジェンダーの視点で「やり直す」ということでもあります。

この法廷の準備の一環として、昨年12月には、韓国、台湾、中国、インドネシアなど被害関係国やオーストラリアの国際法学者のドルゴボルさんをまねき、「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷をどう開くのか」をテーマに国際シンポジウムを開催しました。また、今年2月には日本、韓国、フィリピン、台湾を中心に「国際戦犯法廷国際実行委員会」が正式に発足し、法廷にむけて着々と準備をすすめています。なお、どのような法廷を開くかは、国際実行委員会を中心に議論をすすめています。

VAWW-NET Japanでは、法廷の意義を少しでも多くの方々に理解・協力していただき、歴史に記録を残すために、以下のような出版を企画しました。ジェンダーの視点で「戦後の戦犯裁判」「戦前戦後の加害構造」「慰安婦などアジアへの性暴力加害の実態」を、植民地支配への加害責任も含めて、洗い出すことが出版企画の最大の特色となっております。ご多忙とは思いますが、このような趣旨と以下の内容をご理解のうえ、ご執筆くださいますよう、お願い申し上げます。

<出版企画案>

▲題名『日本軍性奴隷制の加害責任を問うー2000年女性国際戦犯法廷に向けての記録』全6巻（仮題）

▲企画の意図

1) 2000年法廷への裁判資料の提供（とくに<調査篇>）

2) ジェンダーの視点から植民地支配を含めたアジアへの加害責任を問い直すために、加害当事国と被害関係国との連携に基づき「慰安婦」問題に対する加害の実態調査をした記録を残し、今後の利用に資するようにする。

*「日本軍」とは何だったのかを「慰安婦」問題の視点で問うことでもある

3) これまで欠落していたジェンダーの視点から、アジアへの加害を支えた精神構造とその戦後史的意味を明らかにし、また法廷にむけて「裁く」ことの思想的意味を深め、「戦争と性暴力のない21世紀」をつくるための伝言とする。

▲編者：VAWW-NET Japan

▲編集委員：松井やより、中原道子、内海愛子、西野瑠美子、池田恵理子、金 富子
各巻ごとに責任編集者をおく（各二名、以下参照）

▲出版社：緑風出版（担当：吉田朋子）

▲各巻の構成

第1巻	戦犯裁判論＝内海愛子・高橋哲哉
第2巻	加害の精神構造と戦後史的課題＝池田恵理子・大越愛子
第3巻	調査①ー日本・朝鮮・台湾編＝宋連玉・金富子
第4巻	調査②ー中国編＝西野瑠美子・石田米子
第5巻	調査③ー東南アジア・太平洋編＝中原道子・内海愛子
第6巻	女性国際戦犯法廷の全記録＝松井やより（内容未定）

* 各巻に「用語解説・コラム」をつける

▲各巻の企画意図

1 <第1巻：裁判篇>では、戦後の日本および世界各地の戦犯裁判を現在までたどり、それぞれの裁判内容と特徴、なかでも性暴力は裁かれたのか、に焦点をあてながら、これらの戦犯裁判を通じて（まとめで）「いま裁くとはどういうことなのか」その理論的根拠をさし示す

2 <第2巻：思想篇>では、日本軍の侵略／残虐行動を支え性暴力を不可欠とした加害の精神構造への問題提起と思想的課題を指し示す

3 <第3～5巻：調査篇>では、被害・加害の新たな実態解明と責任者の特定をめざす、即ち

1) 被害国での調査、被害当事国の調査で発掘した新たな事実を盛り込みながら

2) 被害実態の調査に留まらず、具体的な加害責任者名を含む加害の実態に踏み込む

——具体的な被害例に対応する加害責任者名を明らかにする。

4 執筆者の構成にはジェンダー・バランスに配慮し、また、この企画の最大の特長である「ジェンダーの視点での洗い直し」という意図を理解していただいたうえで執筆を依頼するものとする。

▲執筆上の注意とお願い

1 以上は、あくまでも「法廷」を想定しての企画なので、特に調査篇に関してはそれぞれが裁判や対外的な発表する際の妨げにはなりません。しかし、刊行は法廷と同時期を予定しており、それまではこの本用の原稿内容の対外的発表は控えて下さい（妨害防止のため）。

2 以下は、タイトル、執筆者も含め、あくまでも現段階での案です。調査篇に関しては、調査に関わった人々の成果が反映できる本づくりをめざすため、今後の調査その他の展開により以下の案が変更になることがあります。その場合、基本的に責任編集者に一任します。

▲刊行予定日 刊行予定=1999年12月～順次刊行 * 第6巻だけ、開廷以降
第1・2巻はメ切1999年9月末、第3-5巻は2000年1月末厳守
(海外の原稿は翻訳の関係上1999年12月末メ切)

▲原稿：各40-50枚/400字 250～300頁

* 執筆に際しては、一般読者を想定して明確な根拠・出典、わかりやすさをこころがけ、「ジェンダーの視点での洗い直し」が随所に反映されるよう、お願いします。

* とくに裁判資料となる<調査篇>では、右翼からの攻撃も考えられるので、証言・写真は裏を取って下さい。

* 「執筆要領統一」については、別紙をご参照ください。

▲原稿料

誠に勝手ながら、当企画の趣旨へのご理解をいただき、「全6巻+アルファ」をもって原稿ご執筆の謝礼とさせていただきますと思います。

▲各巻の内容・ご執筆候補者(99年4月末現在、仮題)

第1巻(裁判篇) 戦後の戦犯裁判

責任編集：内海愛子・高橋哲哉

* 「はじめに」：内海愛子

<第1部> 戦後日本の戦犯裁判

第1章 東京裁判「何を裁き、何を裁かなかったのか」内海愛子

第2章 BC級裁判「何を裁いたか」内海愛子 ほか

<第2部> 戦後世界の戦犯裁判

第3章 ドイツ(ニュルンベルグ裁判+継続裁判+ドイツ自身によるナチ裁判)：芝健介(東京女子大学)

第4章 フランス(バルビー裁判からパボン裁判)：渡辺和行(奈良女子大)

第5章 イスラエル(アイヒマン裁判)：白杵陽(国立民族学博物館)

<第3部> 民間の戦犯裁判と「人道に対する罪」

第6章 ラッセル法廷：古田元夫(東京大学)

<第4部> 「人道に対する罪」(国際裁判)と各国の反応

第7章 旧ユーゴスラビア 柴 宜弘(東京大学)

第8章 ルワンダ 永原陽子(千葉大学)

✓第9章 南アフリカ 永原陽子

✓第10章 ラテンアメリカ 飯島みどり(立教大学)

第11章 国際刑事裁判所 東沢 靖(弁護士)

* 終章：高橋哲哉「いま“裁く”とはどういうことなのか」(仮題)

第2巻(思想篇) 加害の精神構造と戦後史的課題

責任編集：大越愛子・池田恵理子

<第1部> 戦争体制を裁く

* ジェンダーからみた戦争論・戦争責任論

* 植民地主義・帝国主義の戦争責任

* 軍隊の構造

* 「天皇の軍隊」と虐殺と性暴力

大越愛子

徐京植

田中利幸

藤原彰

第2部> 加害兵士の精神構造——なぜ残虐行動に走ったのか

*元加害兵士の証言 インタビュー構成：西野+性意識調査チーム

元兵士・戦犯の聞き取りをベースに加害意識分析

井上摩耶子

佐藤(正)

*男性神話からみた兵士の精神構造

彦坂諱

*宗教が支えた加害の構造

源 淳子

*現代にも引き継がれる買春意識・差別意識・強姦神話

池田恵理子

<第3部> 日本の戦争責任

*慰安婦問題と天皇の戦争責任

鈴木裕子

*戦後日本のフェミニズムと「慰安婦」問題

山下明子

*天皇の戦争責任論

(未定)

第3巻 調査① - 日本・台湾・朝鮮篇

責任編集：宋連玉・金富子

*はじめに：金富子

*「帝国主義と性暴力—公娼制度と慰安婦制度—」 藤目ゆき

*「慰安婦政策における国家の責任」 林 博史

<加害の記録>

日本／台湾／朝鮮

*まとめ：「公娼制度の植民地への展開と慰安婦制度」 宋連玉

第4巻 調査② - 中国篇

責任編集：西野瑠美子・石田米子

協力：笠原十九司／藤原彰

*はじめに：西野瑠美子

<加害の記録>

南京／山西省／海南島／上海／天津

*まとめ：「中国戦線に現れた性暴力と天皇の軍隊」 石田米子

第5巻 調査③ - 東南アジア・太平洋篇

責任編集：中原道子・内海愛子

*はじめに：内海愛子

<加害の記録>

インドネシア／ビルマ／マレーシア／フィリピン／グアム／ニューギニア／オーストラリア

*まとめ：中原道子「東南アジア・太平洋戦線における日本軍と性暴力」

第6巻 2000年女性国際戦犯法廷・全記録

(松井やより編予定)

第3巻：調査①—日本・台湾・朝鮮編（担当：宋連玉・金富子編）

*はじめに：金富子

*藤目ゆき △「帝国主義と性暴力—公娼制度と慰安婦制度—」

우남, 2129102호

*林 博史 △「慰安婦政策における国家の責任」

日本：○西野瑠美子「日本人慰安婦の募集・徴集」←加害の記録

○浅野千恵「日本人慰安婦」

吉田裕子—賀数「沖縄」/宮西「姜徳景」/石井みどり「九州」←確定させる

台湾：○駒込 武「台湾への植民地支配と台湾人慰安婦」

○柴 洋子 +台湾

朝鮮：○藤永 壮「朝鮮への植民地支配と朝鮮人慰安婦」

金ユンシムさんのケース—山口さん？

李サンファ「朝鮮人慰安婦の帰国後の生と経験」(出版済み、翻訳要)？

宋神道さんのケース—支える会へ依頼

*まため的に、○宋連玉「公娼制度の植民地への展開と慰安婦制度」

第4巻：調査②—中国編

担当：西野瑠美子・石田米子

協力：藤原 彰・笠原十九司

*はじめに：○西野瑠美子

南京：○松岡 潔「南京大虐殺と日本軍の責任」(仮題、以下同じ)

山西省：○石田米子「山西省のケース」

韓国挺身隊研究所に依頼「満州」における朝鮮人慰安婦(翻訳必要)

洪サンジンさんに依頼—北朝鮮のケース

海南島：○西野瑠美子「海南島のケース」

上海： 蘇智良「中国人慰安婦」

天津： 林伯輝

*終章：石田米子「中国戦線に現れた性暴力と天皇の軍隊」

第5巻：調査③—東南アジア・太平洋編

担当：中原道子・

*はじめに：

インドネシア：木村「インドネシアの慰安婦と日本軍」

内海 隆子「バタビア裁判」？/池田「—」←確定必要

ビルマ：○林みち子「ビルマの慰安婦のケース」？

マレーシア：中原道子「マレーシアの慰安婦のケース」

徳永

フィリピン：高嶋たつ江・大村哲夫・横田チーモ「トマササリノブさんのケース」

石田甚太郎？「フィリピン戦線の日本軍と性暴力」

*永井 均

グアム：中原「グアムのケース」←シンガポールのケースも。

ニューギニア：清水靖子(「森と魚と激戦地」著者)？

オーストラリア：田中利幸

*まため的に、中原道子「東南アジア・太平洋戦線における日本軍と性暴力」

△第6巻 女性国際戦犯法廷の全記録(未定)

すべて未定